

けれど、フッ素ラドン泉「美肌の湯」百パーセントというそのスプレーが意外に気持ちよかったのと、旅館の軒先でさりげなく野菜を無人販売していた光景は、なかなかいいものでした。

東行庵に着きました。維新の志士高杉晋作（一八三九〜六七）とその愛人おうの（一八四三〜一九〇九）が眠っているところ。ここには二人の恋が、今も冷めずに、木々のひと枝ひと枝に、花の一輪一輪に宿っているように、私には思えます。

命が命に恋をして俳句が誕生

私は恋の俳句もよく詠みますが、ある意味ですべての俳句は自然への挨拶、自然との交歓です。命が命を恋う、そこはかたない恋愛感情の表現形式が俳句なのです。たった十七音に託されていますが、背景には無限の余白があります。詠む人の人生の長さを刻み、広い宇宙を一点に集約できたとき、名句が生まれます。

最後は長府へ向かい、徳応寺で田上菊舎の墓所にお参りしました。続いて晋作

が挙兵した功山寺の石段をのぼれば、山門の手前左に菊舎の句碑（鐘氷る夜や父母のおもはるゝ）。私もふと、昨日の朝も会っていた両親のことを、瞼に浮かべました。

帰京の機内。私の髪は抹香臭かったかもしれない。耳の底に、木魚の響きも残っていました。実は、たまたま訪ねた東行庵でその日、晋作の命日「東行忌」が催されていたのです。偶然？ いいえ、俳句の宇宙を遊泳している人間には、よくあることです。十七音の宇宙が、私にさまざまな出会いや偶然をもたらしてくれます。

ウルトレイヤー！（もっと遠くへ）。これはサンティアゴ巡礼の間、いつも仲間



上＝大河内温泉・平田旅館の前で野菜の無人販売に目を止めた。
中＝長府・徳応寺で田上菊舎のお墓参り。
下＝長府・功山寺山門前。



たちと歌った歌の題名です。巡礼者の間で何百年と歌い継がれています。今回、下関をいろいろと回ってみて、ますます果てしない宇宙をいつまでもどこまでも歩いていこうと思えました。このぶんじや当面、人生も独り旅が続くかしら？ 083



山本洗脂さん(右端)を指導者として開かれている田耕俳句会を訪問。この日は恒富靖子さん作(母一人逝かせてからの山桜)の評価が高かった。

海辺の温泉リゾートにて

到着後、海を眺めながら風に吹かれたこと、海を見渡す開放的な露天風呂、浴後のオイルマッサージ、フグなど海の幸たっぷりの夕食に誰かが持ち込んだイノシシ肉が紛れ込んでいたこと、もうひとがんばり出かけた妙久寺での「田耕俳句会」の熱気、ホテルへもどってさらにもうひとがんばりのぞいてみた「ミュージックホール」の大学の階段教室のような構造とまぶしいライト。わずか数時間、目くるめくうちに過ぎた出来事は夢に似た現実。下関の海辺の温泉宿にまつわる濃縮した時間でした。

だからでしょう。一夜明けると、昨日のことを中空のどこかに置いてきたような雨が降っています。

「遣らずの雨? 昨日、下関へ来られて、今日の夕方にはもう機上の人になっている黛さんに、まだ居てほしいという……」

ホテルの玄関で、Fさんが珍しく、しおらしいことを言いました。「遣らずの雨」は、私の好きな日本語のひとつです。



入浴前のひととき、ホテル西長門リゾートのロビーでくつろぐ黛さん。旅情の渚に5・7・5の波が寄せてくるのを待っているのかもしれない。

こういう詩情を、降りだした雨に投影すること、冷たい雨、肩を濡らす雨が、にわかに別な情趣を帯びて、五感に訴えてきます。ただしFさん、そのあとがいきませんでした。

もう一カ所いい温泉がある、と案内された大河内温泉の「美人湯」として知られる平田旅館で、「朝湯は遠慮します」と私が言うと、売店で「美人湯みすと」というのを購入し、私の顔に向けてシューツ。「すみません、やらせの霧でした」と。